

## 柳色新たなり

×

堤 治

今

から四十年以上前、高校生時代に遡ります。当時の私は文学青年というわけでもありませんが、漢文や古文をよく諳んじていました。

『平家物語』の中の「明けぬれば福原の内裏に火をかけて」や、「石炭をばはや積み果てつ」で始まる森鷗外の『舞姫』も得意なものの一つでした。

その後尊敬する鷗外先生も学ばれた東京大学医学部に入学、学生時代は鷗外全集を読み漁るなどの時間もありました。卒業して、当時から既に、多忙で人手不足が叫ばれていた産科婦人科に入局し、出産や手術に明け暮れるうちに、すっかり文学から遠のいておりました。

さて、医学も日進月歩です。近年、婦人科の現場では腹腔鏡という内視鏡を使った手術が開発され、普及しつつあります。「弘法筆を選ぶ」というわけではありませんが、私は専門学会の理事長という立場で、鉗子や電気メスを選ぶのも日常業務の一つとしております。

今日ご紹介するのは、そんな腹腔鏡の

ご縁で、中国子宮内膜症サミットという医学系の会議に招かれ子宮内膜症の腹腔鏡治療の講演に、敦煌を訪れた時の話です。

敦煌といえば、井上靖氏の作品でよく知られていますが、成田から北京、西安と飛行機を乗り継ぎ、飛行時間だけでも八時間の遙かな西域です。

主催者の方がせっかくの機会だからとおっしゃられて、中国の歴史的史跡の陽関を案内してくださるというのです。現場主義、現地主義の私としてはこのお申し出を有難くお受けすることにしました。

敦煌からさらに西へ沙漠の中を、当地ではめずらしい雨の中、一時間半ほど走って陽関に到着しました。広大な沙漠の中に秦や漢の時代の狼煙台等の遺跡が点在する中で、ひと際大きな人物像と石碑が目にとまりました。近づいてみると、西を見据えて大きく両手を広げた唐の詩人、王維の立像でした。石碑には高校時代の「漢文」で習ったあの懐かしい「元二の安西に使いするを送る」が刻まれているで

## リレー連載

---



西の方陽関にて

はありませんか。偶然の出会いに嬉しくなつて早速撮ってもらったのがこの写真です。

渭城の朝雨 輕塵を迢し

客舎青青 柳色新たなり

君に勧む更に尽くせ一杯の酒

西の方陽関を出づれば故人無からん

日本でも別れの詩として有名ですから、今さら産婦人科医の私が解説するのも面映いですが、この詩は「陽関の曲」「渭城の曲」といわれ、詠むには最後の一行を三度繰り返す「陽関三疊」で知られています。中国人のガイドも知っていましたから、その慣わしそのものが中国伝来なのでしょう。

そこで私の思い出は、四十年前の埼玉県立熊谷高校の漢文の授業に遡ります。漢文の教師巢山先生は、「西の方陽関を出づれば故人無からん」に続き、「無からん、無からん、故人無からん、西の方陽関を出づれば故人無からん」と朗々と私たち

生徒に詠み聞かせてくれました。古ぼけた木製の教室、教壇、先生の抑揚のきいた表情、同級生の無邪気な反応、それら総てが瞬時に蘇りました。

王維の生きた紀元八世紀を想うと同時に、無限の未来に心を躍らせていた高校生時代、この漢詩にふれた当時を思いおこし、感慨深いものがありました。

人生には別離や節目がつきものです。

私事ですが、この度私も四十年近く学び勤めてきた東京大学医学部を辞して、四月から港区赤坂の山王病院に勤務することになりました。永年親しんだ母校に、惜別の思いは浅くありませんが、心機一転、新天地で生殖医療や腹腔鏡下手術で今まで以上に患者さんのために努力しようと思えます。このような折に、懐かしい「陽関三疊」に出会えた事は、もしかしたら、神の教え、かもしれませぬ。日々柳色新たなりの清々とした気持ちで生きていきたいと思う昨今です。